

年号：1716年

月日：11月9日

災害名：新燃岳噴火、享保噴火の概要

### 新燃岳位置図



出典：国土地理院

### 【1716(享保元)年新燃岳噴火の概要】

- ・ 1716(享保元)年、鹿児島県と宮崎県の県境にある霧島山新燃岳（標高 1,421m）が記録として残る最古の噴火を起こした。
- ・ 1716 年から 1717 年にかけて何度も噴火し、死者や農作物被害を受けたという当時の記録が残されている。

#### ▼1716(享保元)年新燃岳噴火による被災状況

人的被害	死者 5 名、負傷者 31 名（島津藩）
住家・非住家被害	神社、仏閣焼失、家屋 600 余軒
農作物被害	田畑被災 13 万 6,000 余坪
その他被害	家畜 405 頭死

### ■1716(享保元)年～1717（享保2）年新燃岳噴火による被災の記録

- ・ 享保元年九月二十六日【一七一六年十一月九日】噴火。この時、東霧島社・狭野社・瀬戸尾社・神徳院及高原・高崎・小林等、民家山林が、皆焼けた。同二年丁酉正月三日【一七一七年二月一三日】また噴火。俗に両郡嶽の新たな燃【噴火】『新燃』と言う。この時、錫杖院及び管下の民家、凡そ諸県郡の諸村の田園、前後通算して被災したのは、十三万六千三百区云々。（寔藩名勝考より）
- ・ 享保元年丙申九月二十六日【一七一六年十一月九日】から翌二年正月七日【一七一七年二月一七日】に至り、霧島山が噴火した時、狭野権現社及び当寺（霧島山仏華林寺神徳院）は、延焼にあい、高原高崎等の諸郷も、民家や山木が皆焼けて、およそ諸県郡の諸村の田園で被災したのが十三万六千三百坪余と記録に見える。（三国名勝図会 卷之五十六）
- ・ 享保元年甲申九月【一七一六年十一月】、復た霧島山上の金剛・胎蔵両池の辺りから盛大に噴火し、神社が悉く焼失し、ここは砂石の為に六尺【二m近く】程埋没した。（三国名勝図会 卷之三十四）
- ・ 享保元年九月二十六日【一七一六年十一月九日】霧島山が噴火した。東霧島社、狭野権現社、瀬戸尾権現社、神徳院、及び高原、高崎、小林等の民家や山木が焼けた。福山市民の十一人が瀬戸尾（権現社）に宿泊しており、死者が五人であった。十二月二十六日【一七一七年二月七日】、霧島山が、また噴火した。灰を降らすこと四日。高原、高崎、高城、都之城、小林、須木、野尻、倉岡、綾、穆佐、高岡等の田畑が皆埋まることとなった。牛馬が多く死んだ。（島津国史浄国公）
- ・ 享保元年九月二十六日【一七一六年十一月九日】、夜半頃から霧島の西嶽が震動して、周囲三里半程の所々で噴火・破裂し、その為、その地内に在る山林及び神社仏閣等は悉く焼失し、その他災害を被ったものは、砂や石が入った外城（外城とは一ヶ郷を云う）十二が焼失し、家数が六百軒か六百四軒、負傷が三十一人、斃死した牛馬が四百五頭、田畑が六千二百四十町八反六畝十九歩【六二平方キロメートル弱＝六、一九〇ヘクタール弱】、被害農産高が六万六千八百二十石余（官報）。その後三四年の間、灰が降って恰も春霞のようになったと云う。（地学協会報告）

出典：鹿児島県江戸時代以前災害史料集成大意 129-137 頁

### 【1716(享保元)年新燃岳噴火の推移】

- ・享保噴火については、高原町の大學氏らが論文をとりまとめており、論文によると噴火の推移は以下のとおりである。

#### ▼1716(享保元)年新燃岳噴火の推移

ステージ	年	月日	記録内容	降下物（山之口） （新燃岳より 30km 地点）
1	1716	4. 10	Small eruption 小規模噴火	-
		5. 7	Small eruption 小規模噴火	-
2	1716	9. 26	Medium eruption 中規模噴火	砂灰
3		11. 9-10	First large eruption (pumice fall eruption) 第1大規模噴火	砂石
4	1716	12. 4-6	Small eruption 小規模噴火	-
5	1717	2. 9-10	Second eruption 1 (pumice fall eruption) 第2噴火1	灰、小砂
		2. 13	Second large eruption 2 (pumice fall eruption) 第2大規模噴火2	灰砂
		2. 17	Second large eruption (pumice fall eruption) 第2大規模噴火3	大石、小石
		2. 18-22	Medium eruptions 中規模噴火	2. 19 砂、2. 21 赤石、2. 22 灰
6	1717	3. 3	Small or medium eruption 小規模または中規模噴火	-
		3. 9	Small or medium eruption 小規模または中規模噴火	-
		3. 18	Medium eruption 中規模噴火	灰
		4. 8?	Medium eruption 中規模噴火	-
7	1717	9. 6	Medium eruption 中規模噴火	灰

出典：高原町提供資料「文献史料に基づく江戸期における霧島火山新燃岳の噴火活動」  
及川輝樹・大學康弘他, 火山第57巻(2012)第4号 199-218頁 (英文を一部和訳)

- ・論文によると、特に規模が大きかったのは第3期（1716年11月）と第5期（1717年2月）であり、山之口町では18～21cmにもなる石が降ったこと、噴火の際に火山雷が発生したことが記録されている。
- ・また、噴火の際にラハール（火山泥流・土石流）が山体東側を流れる高崎川から大淀川にかけてと南側の霧島川を流れ下ったとの記載もある。
- ・第3期の噴火では、狭野神社、霧島東神社などの寺院や人家が焼け、人々が避難したことや、火山礫・火山岩塊による死傷者が出たことが記録されている。
- ・第5期の噴火では、2月9日から22日まで連続して噴火が発生し、高原町花堂や霧島東神社が全焼、高原町の3つの集落の家屋の過半が焼失したことが記録されている。

- 2011年噴火と享保噴火の類似点として、爆発的噴火の前に顕著な前兆現象がなかったことや、火山活動の推移（第1~2期と第3期の関係、第5期から第6期の活動）が類似している点が論文で挙げられている。

出典：高原町提供資料「文献史料に基づく江戸期における霧島火山新燃岳の噴火活動」  
、及川輝樹・大學康弘他, 火山第57巻(2012)第4号 199-218頁